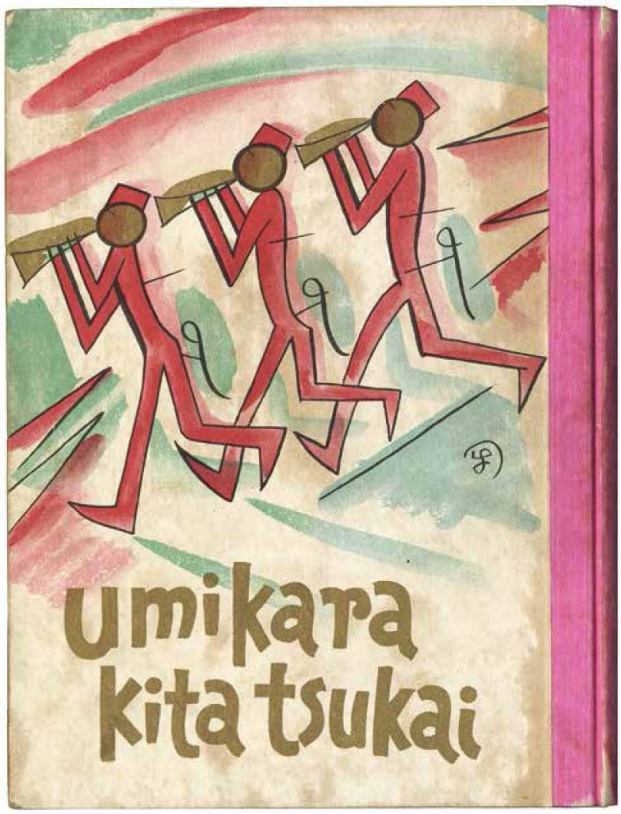
童話集『海から来た使ひ』～今後を童話作家に～



小川未明の童話集『海から来た使ひ』は、大正 15 年(1926)7 月に創生堂より刊行されました。定価は 2 円。表紙・挿絵は池田永治が担当しています（画像参照）。創生堂からは、同年 12 月にも童話集『蜻蛉のお爺さん』が刊行され(表紙・挿絵も同じ池田永治)、この 2 冊は、いわば姉妹編のようなものとなっています。

周知のとおり、大正 15 年 5 月 13 日、未明は「今後を童話作家に」(「東京日日新聞」) を発表し、〈童話作家宣言〉を行いました。そこで未明は次のように述べています。

「私の書いて来た童話は、即ち従来の童話や世俗のいふ童話とは多少違つた立場にゐるといへます。むしろ大人に読んでもらつた方がかへつて意の存するところが分ると思ひますが、あくまで童心の上にたち、即ち大人の見る世界ならざる空想の世界に成長すべき童話なるがゆえに、いわゆる小説ではなく、やはり童話といはるべきものでありませう。／多年私は小説と童話を書いたが、いま頭のなかで二つを書き分ける苦しさを感じて来ました。「未明選集」六巻の配布も去る四月に完了したのを好機として、余の半生を専心わが特異の詩形のためにつくしたいと考へてゐます。」

未明が童話作家として専念しようと決意した時期に刊行されたのが、上記の 2 冊の童話集です。『海から来た使ひ』には、次の 23 編の童話が収録されています。「海から来た使ひ」「鴉の唄うたひ」「桃の実の熟する頃」「ごみだらけの豆」「又来年の夏まで」「二番目の娘」「花と少年」「北へ帰る鳥」「人の身の上」「百姓と蛇」「天下一品」「明るき世界へ」「菫と鶯の話」「子供と小鳥の話」「小さな赤い花」「千代紙の春」「三人の皇子」「金持と鶏」「朝の鐘鳴る町」「ある男と無花果」「冬の日のくれがた」「小さな金色の翼」「春近き日」――このうち 12 編は、本童話集が初収録となる新作童話です（『蜻蛉のお爺さん』では収録童話 20 編すべてが初収録)。

巻頭に置かれた表題作「海から来た使ひ」(「少女倶楽部」大正 14 年 1 月）のあらすじは次のとおりです。

天使の子供が下界の様子を見にいく。舞踏会へ行く途中のお嬢さんは天使に冷たかったが（画像右)、母が病気の娘はやさしかった。その日から娘の母の病気はよくなった。木枯らしの晩、按摩が落とした小銭を天使は拾ってやる。少女は按摩夫婦の家で暮らす。三年の月日がたち、天使は赤い船に乗って帰っていく。帰った天使は、正直な哀れな人達に幸福を与えてやりたいと言う。

金持ちや贅沢をする人に対してではなく、病気の母を看病する娘や目の不自由な人に対し、天使は幸福を与えてやりたいと述べています。未明の思いは、天使の思いに重ねあわせることができるでしょう。正直で哀れな人々へ〈希望〉を与えることを未明は童話の使命と考えました。今後を童話作家にと述べる未明は、こういう童話世界のなかで生きていくことを決意するのです。

〒943-0835 新潟県上越市本城町8番30号（高田図書館内）　Tel：025-523-1083　E-Mail：mimei@city.joetsu.lg.jp